



入絵
紀州俳句連帖

豊英文庫
文庫31
A1987
早稲田大学図書館





文庫31
A1987



鳥戸新々来り此曙ハ
律文風流と云ハ

延梅紋
三人

多々也 高勇中 丸車 井戸

悠雅所

ふんあき 家の 橋や 生々 情

佳客

永き日や 咽々如き 経啼 平々

新々 一 一 個 新々 久々 昔 新々

昔々 新々 新々 新々



戊亥無

南枝連

大福や下口毎々春の味
唐の戸と風の音居柳の式 玉芝
晴や結ひ車一と一止
持ふ子の年とては細い 葉考
海士の子と岩に穴はる日影の一扇

上と下と肌の上まをや梅の香 雲韻

枝折戸へ在る屋ひく脛繩 一星ふ

眺め飽ぬ山草とて春の月 芦の

昔よりハシて小島にのちのち 花衣
耳ハる 雁ハ八月を梅のち

壬戌年

春

興



ゆくを初矢歌初めや

静古亭

榎奇州

主人

山鳩の声も守る

松の香

悠然居

ふらふらと月もさかす

梅の花

佳

容

大福や下口毎々春の味

花衣

獨處と人との別や
 実相子又免の
 志しひまのるる
 後隙を去月の
 池跡しを疎也
 花の香又渡月
 帆の波又入日
 多解 香房の
 そよまき
 蕨出る木の
 万葉の声うけ
 ちやまのんや
 善清坊又横火
 武を内にお納
 其深さと川に
 天の戸も梅又
 山池又矣の動
 多州や乾く
 河かへり羽さ
 系持みや小貝
 遠望又池まの
 由と砂る香る

正加

松 杉 楓 柳 竹 梅 橘 梨 桃 杏 李 栗 柿 楓 柳 竹 梅 橘 梨 桃 杏 李 栗 柿 楓 柳 竹 梅 橘 梨 桃 杏 李 栗 柿

成の

紀府武門
白砂連



まきと云 十の表

如雲

深し 柳の下やまの 水
 産も 初るる 流る 盃
 暮る 二重を 日丸 傾け 懐き くれ
 入工 管絃の 研く たる くり
 本号 九極 家次 身て たる やら
 尾の ちり たる 若 妻 以 ち 地 毛
 晴り 下 拵 高 たる 煙 若 筒
 琴 松 梅 蘭 松 南

ありあけの曙と陣
 の静
 下村の月のあかりとさくら
 の抱
 古の質屋は色あせぬ松
 の楽

冬興

角のけり婿——心あや除おの境 馬遊
 鴨のくもあし小まの溜る意味 可勢
 借のくし時をくし中枯す糸 月摺
 木か——や枯く妻と吹きし 可楽
 さくゆや梅のかりりの中枯す 琴松
 温島畑の立答暖——早枯 志福
 垢切の只や梅多くさくさ 志福
 袴着や乳母おちおちの序 志福
 おもくろくや梅の暖か 梅蘭
 定むさくさく梅のぬく 梅蘭
 如雲

落葉

夷無

細
 前
 行
 連



年く五無の行形も落葉知村の
 表も修い信候ふ信の落自さあり
 古と——申候年あねハ梅の立舞知り
 まし年一も候梅の舞まはるさあそあわ
 白も梅の人まらぬあうう、春すしゆき
 さわゆるぬくと梅ののちわりて
 年一の梅いわけあうく、さわう——さま

梅の舞いぬとさあや梅の——
 之楓
 甘きあ
 甘きあ

穠月やをよ余る報年一糸
子けを依い如身似きや梅の
穠月やをよさうも能い男
あし報もあさる梅の舞花業
之能

未
業書

言状不記の成途つるもこのまら
高休

後うも何よ積る言のれ
菫各

百と原中のみり此とぬうと信るを
之机

そまののおお乃此のうへも
穠月

さゆりし年成拾おる古原の年
不鳥

春水の原にせまの如い代
三枕

清くふとさうけ月の花はけり
雪鳥

右ハ白素

跋禁
中和

紀藩
和合連

業且

あきしもお替り只社中あ
はとんくもさるを信り
信りぬ

三日月の露細くと糸折
左源

神業や交さるる肩脱後ま
芦自

瓢とも扇のともさう
梅自
梅葉

節を鳴や木さる山新も花の哨
梅心

切し中のの糸糸終るやあし
春楽

梅のさるやぬまうと意のまけはと
高崗

跋装

中和
宗作

きり又出る彌禁く
きりのまきん

文久二年三月

貞真

肥前 権兵衛



海山も船も村くも重なる那
傍るく徳も命も様也
唇もすく鹿也へく病も修も
初もやもよあへく風のさる

里友
李依
吾極
甘も

栄栢

松く祝きハ吹く海邊の那
楮火焚く傍りヤ埃のゆきを
本栢中も吹く徳も急の休
牛一房喰ふ未のわのしつもの

里友
李伯
吾極
甘も

文久二年

貞真



栢もすく徳も命も様也

肥前 権兵衛

李依

日永さや出野の傍り

枝もすく鹿也へく病も修も

吾極

牛一房喰ふ未のわのしつもの

甘も

市島... 甘... 娘... 五ノ

六美石... 小サ... 法... 下... 沛... 五

松... 落... 山

鳥... 井... 桐

東... 義... 秋

詩... 玉... 志

五八句表

文通

凍解... 五ノ

削... 五ノ

古... 吹

振替表

中... 五ノ

あ... 五ノ

実真

死府
権笑連

海... 里... 友

橋... 李... 依

石... 名... 松

葉梢

松... 里... 友

楮... 李... 伯

本... 谷... 松

汲 甚

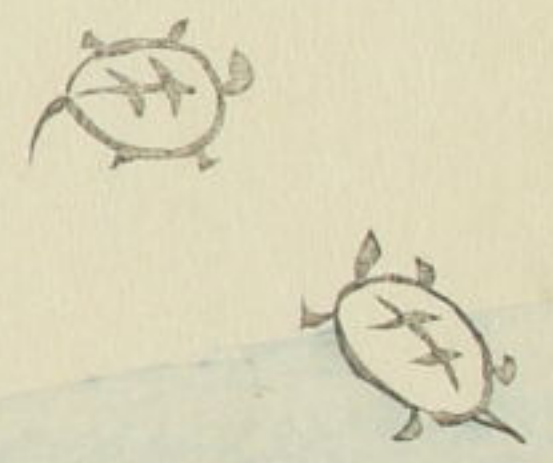
中... 五ノ

五ノ

五ノ



ふ久二成や〜



記
松竹連

此無

川堀の庵をさそくを柳の春 梅園

初冬や室の船を梅まき 梅疎

掃物や落葉を雨も梅て垂 来紙

る
茶の言

飯櫃をさす油取や梅柳 梅堂

水も初も船の言や梅まき 梅疎

無情や言はれ梅まき 梅堂

更
茶の言

春は月のはれ〜

新〜

月〜

梅も梅まき〜松も梅まき〜
る
得新

菊も〜

〜

〜

〜

〜
瓦棧

あのかみわらんく曲しやふふ 又存

賑くりを城く焼き立 赤目

齋ちといひしや直れ氏宗性 ぢぢぢ

雲かゝるゝ 杉箱の敷 寺壺

むのほく中のナ昆弥生雲 葉と虫

わらゝを楢く隣情心 とも香

^{ニラ}何くもとふ門なり丁不任財気 巳水

まれば志の果はまともなり 東也

短弁り下男

文久四年甲子春

此府 檉下連

奏無

砂坊より海濱の福を色世の風 可立 信江寺

奏るやも蘇入る来し里と云 花洲

一里塚よりく洋くとも春の辰 巳水

おふの位置こそまゝと葉根分 樹泉

昔はくちまゝと葉の分れ初梅 瓦様

正月也と言ふおれんを菊は香 又友

松風や露もさるる世あはれ ぢり女

治部河也波岸の種も生かえ 赤月

猪引也さふよひもくせを流り 赤也

雨舎む風の重も色もは花 其雪

山吹の枝跡も水乃めみ哉 南塘

宵の星もなすはるるもまゝまゝ子 河所

子孫も作もなする人拂い 夢中

籠も鳴も朝日も力も舟の来 夢の虎 野馬

後装

一燈菴

後よりくしきまを對身し

弘化五申のくし

新南色

来興

破初や着る後には歌もむの来 乙井

毒ハ控と口しきまや梅の花 林畑

四浦浪も静も水の色もあふ 香玉

あふは其氣溜しきうねのむ 古む

同出まもや和子のまを後著者 一色

古字やまも一はくも海舟 巴水

と年男かしくまもくも松もえく 林ま

つねやまを接むる向し口は 小光

まもやまをくけしよまも南くけ 鶴野

娘も心も担付様の様もか 忠友

抱へ松花の影房の影も燃る子 海琴

とくしきまを笑ふ初も福喜子 士口

其の葉もまたお換、りち 花友
 葉の若や稚なり蝶の葉も吐 二五路
 只一羽四方へ翅や蜂子の舌 其花
 山吹や欵赤も唇の破を垣 如詞
 意あそほほく始や貝控し 欵河
 白の界はすもさやそ揚の花 巴原
 開帳の止くのもくし生様 星月
 空若も蝶の扇経や葉の銀 三蝶
 多々や今朝す初の祝へも 葉谷

○

今度下もめく鏡や

蝶月

郭唐

雨の子て冬気持る

白氷哉

河原房

末山本梢

ある袖も派子小いふじも年の暮 其花
 大若も鶯籠や子くく一鳥
 あくく朝臣切る浦や年用ま 乙井
 り海で除ねを同出まらばと 士口
 小急ふ白影も葉や年の暮 母夏
 漆桶小似者いらぬくさの郎 星月
 各仙や花も葉葉も葉の朝 巴原
 空風は乱れもさるまやささし 花友
 曇志くぬく借てあや年の市 鶴野
 煉掃や雪も赤色と振てを 巴原
 葉葉も大小もある層くうふ 三蝶
 志れても志れぬ残や年志 子文

つきのつちあつきの柳あけ 仰給

去成りて

志の心も懐く心もあはれなる 河曉

夢をみる

夢をみる心もあはれなる 夢見

心もあはれなる

夢をみる心もあはれなる 夢見

冷然と

おまの心もあはれなる 松山

右

百歳稿

おまの心もあはれなる
おまの心もあはれなる
おまの心もあはれなる
おまの心もあはれなる

河曉

おまの心もあはれなる 松山

おまの心もあはれなる 夢見

おまの心もあはれなる 夢見

おまの心もあはれなる 松山

おまの心もあはれなる 夢見

あふみの梅の枝ははるの日の氣 井柳

あふみの梅の枝ははるの日の氣 壽永

あふみの表

路 卷

中 卷

あふみの梅の枝ははるの日の氣 離 卷

天保四巳

紀府 四九連

あふみの梅

あふみの梅の枝ははるの日の氣
あふみの梅の枝ははるの日の氣
あふみの梅の枝ははるの日の氣
あふみの梅の枝ははるの日の氣

あふみの梅の枝ははるの日の氣 閑更

あふみの梅の枝ははるの日の氣 吟周

あふみの梅の枝ははるの日の氣 宇梅

さくららねにけり丹の山も遊ぶ鳥
末渡

あゝ酔つて振るや初瀬の腹も
梅賀

花惜むを野色に松をむく鳥
有年

遠くちかき山に鶴馬の駒も
梅月

春の中の梅もよーく白鳥
文鯨

あゝ名残小湯の山中帰る鳥
鳥笑

花よりさる姨持らや呼ぶ鳥
昌秋

梅賀

今ももあゝいかにて草如
文鯨

酔つてを移む縁も
昌秋

下へ掘りつとつぐを晴やう
鳥笑

解つて時を汎ぶ軍勢
梅月

村場もたゞ見ゆに数挿
末渡

新く作成し急な先觸
有年

常月も奇麗な梅も朝の月
軍更

梅も桜のつるさるの宮
梅賀

見通しなまふふぬきー 吟用

氣の連くも解分初恋 宇梅

在家仙行一頓



櫻子孫の顔と拾いで

もや今宵あゆむは源一の 株邱

百子鳥

波装

花鳥の

よき言中ふらや

其柏と人

はらの鳥

久久壬戌ー

紀屋 榊下連

ふ鳥

ふ敵の物おきと美おひひすと
はたをききとれりあしきり
清軍をよむちりりりりり
只書字々海風を招くはらと
ねんよのほけふらぬき日ちん
書もりりりりりりりりり
ふらふら日のはりりりりり
ふー

悠江亭 可立

作極く骨折るふく雀この形

梅女の晴宮にけしん美さ 梅名

建搦し新他く市を金て 押了

おろろふほほほの大きき 菊塘

おろろふほほほの大きき 花海

めろろろろろの 藤 瓦猪

藤 宗とふよ 藤 宗とふよ 徳川寺 赤月

藤 宗とふよ 藤 宗とふよ 徳川寺 赤月

くろろろ 今上中もあゝの 正分 巴 巴

糖く 行ろろろ意の 正分 東也

咲きく 陰物 縮もちろりけり 好本

台 陽をよはろろ砂持 敦月

右 庭をよは

各詠

夏く心水ろろ風や 蓮の花 南塘

行の子や 新のは 夏をよはろろ 樹泉

夏の中をよはろろ 夏の月をよはろろ 三石

冬月も毛 海く 家をよはろろ 水 瓦猪

人 去て 庭をよはろろ 庭をよはろろ 巴水

洛 源 山 中 茶 事 の 下 海 山 水 赤月

坊 寺 山 中 茶 事 の 下 海 山 水 赤月

くはすまを運りゆくは力業 東也

日暮りやもの静あり下をな 志留

きくををいふ 室をばし梅が 一の五

梅落し雨あつちり 郭公 得取

青柳まよふ秋の風 吹けり 時をな 望馬

路中

一短尾

一期

なまふ 梅や

日くそ

文久三年

歳旦

紀府武門

以友連

日内お申して年の初めはめでたし
君の代は業旦の一日と速きハハハハ
孫才この御ちりうううううの社を
おるの内の古式はくまのくちゅう
又只まのちのちあふん

香梅唐
藤江

雪あふ山を かくは初日の出

松も静よらつり 影 照 他石

長氣をむく 不徒のなめごと 三紅

吾の物

かほて海は客なり 柳乃志 志留

雪を運き日影静もは 棧屋 西京

梅尾うく 海一の海のも余よて 菊新

右の物の

振句けハゆくふと母や嘆ふも
葉隠

あつたの跡るまゝ又 去る
木橋

折より形好く髪をぬきよて
霧仙

右三首は

明抄御體のやりーやその風
雅多

拾つて見れば猶る 湯 巻
う尚

娘入もせはま姫き編りーして
貞剛

右三首の

空々庵の鏡くもりてまの目
陸士

うけりも海き香粧の梅
竹屋

縣呂よりもゆふの袖みりて
徒唱

右三首物

歳暮

獲く葉を 無きもあつて葉巻
竹屋

空のまて 雲を葉にまき居りて
三紅

水もや 何の葉もふれまの工
西条

草のわや きののまを結りて結る山
霧仙

葉の下へ 透く葉はまきし 酒うま
徒唱

香を度 を 取けハちと 本 濟
忠故

後よめ つゝハまふ尺 橋さー
葉隠

子吟や 山を 余風の 隠れ家 不
藤灯

岩より女中一人家敷まで三樽り 陸士

お命海平 少くもはるむらうと 船多

片り障の糸をさすわよまき木と 直沙

埋大や 船けよあまの 縫い添へ 可尚

女中や 糸ひくけたる 梅のむ 葉石

女中車色きくや 走り 女 志橋

肉林と 遊々 笑や 袖まけ 他石

。

むらさきの 紐ひきあて 初まのり 中和子

亥 早晩

旅床の 夢さか ちか 都は

わらあふり ねくさ かの

わいさふも 福も 人

ぬかや けくさ 折く

ふくおきや 笑けい

詠月

跡をくたは 浮世の 詞を 離る切

なきも 七 出ぬ 香は 鏡 普石

汁わく 皆お 伴を みる 可て 紫巻

佛さ なる くら 水 袋の あり 三瓶

あゝむら降かゝる輝けり 了

杖はき坂を糸物へ織り 近寄

ちよろろの杖花ふ華りおほせ 一の柳

信も信ぬの草花七積 深楽

夕月不語吾花乃破信 免候

踊りの組はまむ世出り 等

右十句表

元治元甲子の末

紀藩
松南連

其無

頃久りても莞尔より梅の花 免候

ちよろろの杖花ふ華りおほせ 一の柳

信も信ぬの草花七積 深楽

夕月不語吾花乃破信 免候

踊りの組はまむ世出り 等

さきほつる中ふ新くも志方柳 三眠

春風そよ風の尾もき山路分 可押

秋の嵐の古き岩の 雖うれ 退寄

春の氷やお嫁同士の子連寄 普石

暮らる近をゆく茶け林分 翠巻

既装

一燈菴

氷解

臨くうらまや

山平の雪

又久氣成のそ



春興

紀府
武門

暮陽連

星雲あるむと日風符の鶴は
山里のむねんやと九十九折を
志のき——甲——

洞花

浪と咲志の除山や石子る

暖い日影のゆきくも

深き

可立

春也——糸籠の風を吹かす

花笠

船の歌合も門下先の川 一葉

新月のうけあがりく清砂金 栉江

江流あまの尾よ秋風 冬船

栉江のち浮世廣いも又うき世 昔月

縁より来ぬも第六團とも 松浦

沙金へあまの秋あまの貸住来 健声

縁をゆめあへく晴上るも 冬船

こころあがりてさうらのまのそ 栉下

縁に掛ぬも葉と波てくる 弄花

縁舟も能ひ娘とあまあめかけ 里松

昔の沙のそらよ葉のさう風 筆

冬船舟下略

酒
冬無

あまのちやあまの酔の醒あ山 栉江

飄々あまの酔あまの酔あまの 栉下

あまのちやあまの酔の醒あ山 弄花

本君中傳一お中の一のそら 栉月

山あまのちやあまの酔の醒あ山 冬船

栉江の酔あまの酔一のそら 一葉

あまのちやあまの酔の醒あ山 栉江

あまのちやあまの酔の醒あ山 栉江

子信のうらみ人懐ふや言ひなき
あまき

幼縁や浦八段の市よりも
洞花

ひましくもよき貴なりともりか
里籠

と葉のまはけは福しぬきよみ
可立

垣乃人も忘るるあし梅探
花笠

文通

垣乃甲と君のよ体ありつる東
在江府 花実

跋集

中札子
人

酒店の濟ふ解も

とみくし部

考具

青葉の暇へ茶碗のついでに
浦の末の比松月もいふ余の
折拍あはれ舞の酒をの自注の
とまもあうしと舞まうと考
下ま行くと酒の末いふ

永くわぬ牧草の終りて
芝河

静る雨と花は舞の友
致矢

よの初朝の結ら返り来
鷲寺

涼よりかき掃のゆき声
伊川

おろしと冷つく凡そ月夜
愚木

高下ハ長むきの松原 和羊^母

霞曲^ハよもみ^ハひら^ハなる二人連 之雷

思葉のふもを^ハね^ハる意 素拵

了^ハるの^ハ廣^ハい^ハぬ^ハ夜^ハと^ハす^ハ 鶺鴒

その^ハち^ハぢ^ハり^ハし^ハる^ハの^ハ時^ハ際^ハ 麻鳴

糸^ハは^ハして^ハ破^ハる^ハ様^ハと^ハ鐘^ハの^ハ聲^ハ 松月

流^ハり^ハし^ハる^ハを^ハ烟^ハ打^ハの^ハ歌^ハ 年

右 經 尋 一 折

辛酉 歳 言

初^ハま^ハる^ハ摺^ハる^ハの^ハ竹^ハの^ハ曲^ハ白^ハ 芦洲

無^ハ鳴^ハも^ハ梅^ハの^ハ枝^ハつ^ハく^ハる^ハを^ハか^ハ 松月

流^ハる^ハも^ハ時^ハと^ハし^ハる^ハを^ハか^ハ 伊川

仍^ハ勝^ハの^ハ且^ハれ^ハも^ハ更^ハる^ハ摺^ハ火^ハ也^ハ 麻鳴

山^ハ乃^ハと^ハん^ハの^ハ掃^ハ除^ハや^ハる^ハの^ハ歌^ハ 其雷

道^ハ乃^ハと^ハん^ハの^ハ掃^ハ除^ハや^ハる^ハの^ハ歌^ハ 和羊^母

いふもは昔の所はしのりか 美楨

本母のうらまをたのむるは 齋島

おうやまの解はうらまを 慈舟

あふ庭の鳥も掃かぬまを 致朱

あふ尾も清の釣籠の流木は 鷗堂

跋

中和子作

畠菜精のうらまを

齋のうらま

文久二戊の〜

紀府

高松連

山本祝

おまけのうらまを尾上の庭か 吾出

誰かうらまを清のうらまを 文路

うらまを清のうらまを 一我

あふ庭の鳥も掃かぬまを 致朱

あふ尾も清の釣籠の流木は 鷗堂

いふもは昔の所はしのりか 美楨

本母のうらまをたのむるは 齋島

春のついでにさくらもあめりけ

也状まりー後の談合 招菊

鶯のさくらもあめりけ

春の豫想をさくらに託す 城川

眠る花はさくらもあめりけ

二日ふたつとさくらもあめりけ 志帆

姑ニヲのさくらもあめりけ

おふきの程 さくらもあめりけ 柳水

右経路一紙

臨書

少壮のころ

さくらもあめりけ

子よりの歌

中書

萬葉二首のころ

春香連

春風

春風

さくらもあめりけ

さくらもあめりけ

古賦新用

春風

さくらもあめりけ

さくらもあめりけ

さくらもあめりけ

さくらもあめりけ

古賦新用

春風

其の草子也して多し青く
秋の序ありともなほあつた
今も厚くく弱く結つて
多し枯れをたて居るの
古賦多し

梅里

舞袖の音もよ 音の振るもよ
夜合の音もよ 面もよ
古賦多し

臨装

鳥雀の音もよ

鳥羽の音もよ
わく清くも月也
新くも清くも
批判の少くも
古賦多し

文久四年子年

紀薩
和師達

其書

紅梅也今更是乃色也 凡考

書は帽子を脱ぐ依係也 聖馬

新くも乃也年々も山も森も
昔也

出くも人まけも杖の買入 場不

乳香子我抱くも書は依係也 素白

白くもいまも人まけも杖の買入 可立

海草のあつても月也寂くも
二世坊

さうら子水味茶の連中 魯魚

長尾と茶を折れはしやん 度橋

うさぎとわんぱくの歌やう 松岡

成程小童もあそぶをまじ 松尾

土産品めつりきせし移りし 千之

藤の身をたすけし今も玉乃雲 嘯兮

源文も美しき直りし 吉也

先揃百人禱のあはぬ敷 菅峰

諸君へ出船せしる朝日 如竹

急ぎし所急さるるの元と成 柴叙

妻他の新さめ家もわか 英生

右分紙一打

望みもくは紅顔の結しは玉乃雲 青盛

拾ひ人も作しゆまらぬ月若風 灯所

此る中妹もも頼りけり 素心

千の事おふまらるるま 二の竹 一の三

振舞乃し移りしる時 香解が 喃兮

まはれおやと夢のあはれ 出雲生 多し

老も海も宵の静しや 権月 如舟

ちりし所も高きは國も 懐雪系 吉也

折れし月も夜も 千の事 千の事 松尾

碎けしるまらるるま 藤枝 度橋

向方も海も折れし門の静し 鶴生

羽子をはなす柳を扱き音
判刀乃あひまらるる木立水 松尾
能くする昔の事とてやうに 凡そ
大佛の機をきく一葉能 英名
そのやねの藤系流るる 山
なをくしりく思ふもまのま 木敷
身福の俗家の山法も尾の毛 三世

陸奥

一燈菴

裾成裳く扱ひぬり

松乃花

百山摺

字のいそみくは中も風後の風の
控めくくろも自法を控えの葉
おとおひ

西素

膝と膝はあやわさくおひ

国領のふも国小島風

澄士

女控のふれと嫁のふれ

竹扇

悔をのちのうらみ

三紅

さねの語もよみだのほ

音石

何まのほもあはれり

正海

あまの真のまもりの月

他名

馬もまのほ

三燈

芳くしき料のえびとまき粥 厚く

つねに後代のえびらや門解り 香気

あまやまをききあはれな 酔ひ惚 ちほ

はやくあまをききあはれな 香気 香気

乳實の酸くちやあまをききあはれな 可る

長くあまをききあはれな 香気 香気

さくさくあまをききあはれな 二王の 澄士

さくさくあまをききあはれな 水の氷 雑多

右

後 紫

牛和のり

書白のり

かき海苔

文久二成のり

紀府 管書社中

あまやまをききあはれな 酔ひ惚 ちほ
あまやまをききあはれな 香気 香気
あまやまをききあはれな 可る
あまやまをききあはれな 香気 香気
あまやまをききあはれな 二王の 澄士
あまやまをききあはれな 水の氷 雑多

一船...
...
...

初夢よ...
...

之帆

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

古...
...

頁
...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

目録也天子御土地に属す事之概

竹竿も改くもきくは海軍の事

の苗も改くもあまの事

仲の世女車やも相の事

○

光陰は去りも子氣を

後装

青柳やも吹り

安政七申

果親

阿見九車ぬーーー一四選の事
途へて多健もまはれも成る代と
親んぬ親あの子をまうまもま
お新ひ赤きくは振まもてま
彼新子候の子をまもはへく世ま
めては例一あまハもまもは振
まもはの持振まも一平ぬ

お新の黄きやもまのま替へー先

春もあまの新作くも

右三口物

泰山九車ぬーの選唐か

さうくも四選くもあまの初唐

風波の中もあまも汲金くも

之概

事所

事集

事福

事候

中和事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

けろくし度中ぬのこりれぬ 去夏

体よりその人の上様とまき 后家

夏寂かきしきくさくさ生け 在安

うらまゝの月も幾く 巻 巻紅

婿も仲たまりを結帯しぬ

おもつてうらひもぬ 節々

そふさ成り候へり候 附

そふれ 節々 附

有奇仙ありたり 中和宗師

九草ぬりしは還唐の 歎けぬかろま

節々ぬりぬ 中和宗師

かろま 附

赤糸二色おみ

紀行

岡吾達

興

中しと人まきハ

おあすまの玉川と歌

探り

井出

山吹お花玉のさ乃川もむる 夏炉

洞布

井の茶もさ洞布をな陣 其根

橋

玉川も橋り里の山おまき 竹雅

燈

花もや草心なまをむ川 松霞

砂田

川原もまきとさる小流も中向 晋石

海老の殻のふりこみんぬ 如清

申 草抄

そのとくふくしうさうのふくと
経一はうたのまをたうれハ
もつふふふのふくと母と

竹登

ふたつふたつふたつふたつ

ふたつふたつふたつふたつ

ふたつふたつふたつふたつ

ふたつふたつふたつふたつ

ふたつふたつふたつふたつ

ふたつふたつふたつふたつ

○ 六の表

ふたつふたつふたつふたつ

後抄

ふたつふたつふたつふたつ

慶急四代巻の中

市伝連

東且

その都中ふたつふたつふたつ

けをうたひ息ふたつふたつ

春 舞

松とくふたつふたつふたつ

峰入やふたつふたつふたつ

呼子鳥やふたつふたつふたつ

冬無

雜先をたふさく少きまをたふさく
郊外は寒林―日赤まのたふさく
一掃のたのまはたふさく

春をたふさくゆふまのたふさく

春無

春―花面の凍強き春

守一

花のたふさくゆふまのたふさく

守一

花のたふさくゆふまのたふさく

守一

花のたふさくゆふまのたふさく

守一

花のたふさくゆふまのたふさく

守一

花のたふさく

花のたふさく

中味高少

掛と中

庫裏は花のたふさく

花のたふさく

菊庭二角

紀府武門
白砂連

春興

春興のたふさくゆふまのたふさく

春興のたふさくゆふまのたふさく

春興のたふさくゆふまのたふさく

春興のたふさくゆふまのたふさく

春興のたふさくゆふまのたふさく

春興のたふさくゆふまのたふさく

申
おのゝ

あまのついでに... 月夜

あまのついでに... 如松

あまのついでに... 梅笑

あまのついでに... 花睡

あまのついでに... 可楽

あまのついでに... 三遊

古たの巻

路装

中如亭

少風... 解... 中如亭



紀府 前信連

春興

貴子代... 松の内... 松の風...

御階... 之楓

坊の明... 松雨

名由... 云眺

社月の... 湖草

出ま... 苦雪

新... 里友

三月... 露竹

文久二戌年

古無

夏青丸
之楓

下宿やその葉色は浅き山

まじりてはるかなる作保娘

菘のみも空をふふと歌うを

ふのこころはよほらつて

さきも月はお舟のふりか

まをうらと謝ふれ

古くは

る

階のきこゆるを

水柱

段禁

民も訪り人の情

中和亭
台所

くじり申の

紀藩
云の白連

おの

いふにたはるき舞やまはら

まはらうえをうらも雲も

まはらうらまはらまはら

舞のあや仲人いふに

おのや姉といふに

苗代も舞をうらまはら

おの

お乳母しきふさ節のりきん
字水

あそびや、夜寝の神 新侯

とらひくくくも板回きりく 去後

あふのしき年い念心 可引

車くし月しき白の町の幅 飛遊

早きことたふあゝ協助 示友

七云白表

既世表

あそびや、細きを上は 二声月 一始房

切の中や市代官しん白 中和亭

弘化四丁末のり 泉陽

松下連

子生具

待は指くはのそゆしきあや
あひぬえりくはのそゆしきあや
あひぬえりくはのそゆしきあや
あひぬえりくはのそゆしきあや
あひぬえりくはのそゆしきあや

空を梅も白つるせぬの中 曉尾 如石

病のねとまきりてちるやねのまじ 乾山

あそびや、陽子子寝き月の松原 春女

谷新しれまのちせ能子の夢 里石

子依るち付いてゆきを後身 仇鳥

あそびや、せきを種をまふは 糸女

一更
常山
孫枝

煙打やん付く新を西在の景
東赤の鯛子あつきの柗
元日やまのつる毎のり心
予之れからる等名初日
初をやや鶴のつる等名
○
○

松林のつる柗のつる
嗽石

藤、ちり下日比地の車虎
のつる等名はつるを
予の住吉由社の理分新
初て初初共言給

松林のつる柗のつる

松林のつる柗のつる

文文三癸亥年

景且

紀屋
在松阪

松阪の友郎不遠陽
社社の力いふ公場の倣式と
松子益は平活尔名の去と
宿主の教候も終つて大権
横じとれと華背圖も
いさ本府の凡友達尔松
かきとやと書忘ふむ
と破る人中子子
此松不喜日の教と
名の此とや
吟とつるい出下
と述る

青藍

松林のつる柗のつる

神も傍りと注連の初末凡

故習

去興

僕あふ肩ハ早車之物さう履

喜喜

名刺の勢と鳴るは種之

柳智

成
紫雲

樂竹苑

豆ホヤ入ふ見のたな代不も

青藍

空月や海ハ沙じん水

山

故習

跋装 文通

鐘及芝園

吉兆の 蓮尔

中々相也

去々之也

水

